

2. 川崎市精神保健福祉の現状

平成15年3月末で、精神障害者数は全国患者調査からの推計で21,000人であり、精神障害者保健福祉手帳所持者数は2,509人、精神保健福祉法32条申請者は9,061人となっている。精神科病床数は1,601床、精神科デイケアは痴呆老人のものを除くと7施設で定員275人となっている。精神障害者社会復帰施設はリハビリテーション医療センター内に生活訓練施設、地域生活支援センターが各1カ所整備されている。地域作業所21カ所で登録者数496人、グループホーム14カ所で定員62人となっている。

川崎市内の7保健所での相談者の実数の合計は3,350人で、この20数年間で保健所の相談者数や32条利用者は、共に2倍半程度増加している。保健所での相談者数や、32条申請者や手帳所持者、社会資源やなどの増加の状況は以下表2の通りとなっている。

表2

	保健所 相談者数	手帳 保持者	32条 利用者	社会復帰 施設数	作業所 数	グループ ホーム
S. 53年度末	1428	—	3332	—	0	0
S. 58年度末	1490	—	4862	—	1	0
S. 63年度末	1905	—	6169	—	5	0
H. 5年度末	2385	—	6895	—	11	3
H. 10年度末	2808	1353	6578	0	20	11
H. 14年度末	3350	2509	9061	2	21	14

(データは川崎市衛生年報、川崎市健康福祉年報¹⁾などによる)

川崎市における精神保健福祉の展開は、最初に保健所の地域保健活動が始まり、続いてリハビリテーション医療センターの開設、さらに地域作業所、グループホームが身近な地域生活支援機関としての役割を果たしていた。

最近の約10年間は、これまでの支援のあり方を越える新しい展開が望まれていたが、平成14年度に大きな変革が行われた。リハビリテーション医療センターの再編整備に伴い、精神保健福祉センター、地域生活支援センターが設置された。また国の精神障害者居宅生活支援事業が開始されるのにあわせて、ホームヘルプサービスと訪問個別ケアを専門に行う「地域訪問ケア」²⁾チームを設置したことは、大きな意義があったといえる。

始まって間もないこれからの新しい支援の方法である「ホームヘルプサービス」、「訪問ケア」、「ケアマネジメント」、「退院促進支援事業」などを、どのようにこれまでの支援のシステムに加えていくかは、今後の重要な課題となる。川崎市にとってのみならずどの地域にとっても、包括的で継続性のある新たな支援の仕組みを作っていくかが、大きな課題となっている現状である。

(大山 勉)

<引用文献>

1) 川崎市衛生年報、川崎市健康福祉年報(該当年度版)

2) 川崎市リハビリテーション医療センター所報(平成14年度)

第2章 研究の目的

精神障害者にとっていわゆる生活障害（生活のしづらさ）は社会生活の中で様々な生活上の問題を引き起こす。この研究では精神障害者ホームヘルプサービスの実態を把握し、彼らのリハビリテーションにどのような援助効果があるのか調べてみたい。またホームヘルパーが統合失調症を中心に家事援助等に入った場合の精神症状の変化、妄想傾向のある精神障害者等の関係などにトラブルも予想される。その場合川崎市リハビリテーション医療センター内に設置された訪問ケア班のバックアップ活動の有り方やその機能評価を行いたい。個々のホームヘルプ利用者の認知障害のアセスメントや利用者ヘルパーの介助をどうして人間関係の変化や、ややもすると自閉的になり人間関係で易疲労性を呈する統合失調症者にホームヘルパーとして、どの程度の時間的にかかわりをもつのが適当なのかを調べるのもひとつの目的といえよう。これまでの精神医療の一般的な考え方ではヘルパーが家事援助や入り、清掃などで障害者の援助をすることは逆に障害者に依存心を植え付けるのではないかと懸念も出されている。そのためにも能力障害に対する適正なヘルパー導入時間の客観的な適正時間も検討してみたい。また生活の中での家族関係、子供の養育などについてもヘルパーの貴重な生活体験を生かしてよき相談者となれるものか、また利用者のQOLが向上するものかも検討したい。本来であるならば詳しいアセスメントを対象障害者に行なわなければならないがこの課題はケアマネジメント事業の中で行う予定で、川崎市では14年度から川崎市内の精神病院関係者、リハビリテーション医療センター職員、保健福祉センター（保健所）の職員などによる、ケアマネジメントの方法検討部会を設置した。そして①ケアマネジメント事業の実施方法の検討、②ケアマネジメント事業実施にかかわる予算など事務的検討、③退院促進事業とケアマネジメント事業との整合性と実施方法の検討など3点について検討している。このケアマネジメント部会の方法や検討についてもいずれ報告する予定である。さらに今回の研究では取り組めなかったが、川崎市でも三障害（身体、知的、精神障害）をまとめて障害者福祉計画を出す予定であり、これを受け、行政システムのあり方（三障害の支援統一化）を決めていく事になり、他障害（知的障害、身体障害）のホームヘルプ事業等在宅支援事業との違いを超えて、特に支援費制度のない精神障害の場合にはどのようにシステム化するかが問題となる。

今後高齢者も含めた三障害の地域リハビリテーションの考え方がいろいろに発展するのではないかと予想される。精神障害者在宅支援事業の検討をして、今後の新しい方向性をさぐることを研究目的とする。

（菅野 到）

第3章 対象と方法

1. 対象

川崎市では、国による精神障害者ホームヘルプサービスモデル事業を平成12年11月より開始した。このモデル事業は平成14年6月で終了とし同年7月より本実施とした。この時点でモデル事業利用者23人の内21人はそのまま利用継続となり、平成14年度の利用者は102人であった。

この研究では、平成14年度の利用者102人をこの研究の対象としたが、GAF評価とアンケート調査の項目については、平成15年4月から同年6月末までの調査期間中に、本人の回答が得られた72人が対象となった。サービス開始から調査時点までの、利用者102名の平均利用期間および標準偏差は10.8±7.5ヶ月であった。

2. 調査項目および調査方法

(1) 調査項目

① 基本属性等

性別、年齢、居住区、依頼経路、診断名、家族状況、日中の過ごし方、合併症の有無などの項目。

② GAF (The Global Assessment of Functioning) 値¹⁾

DSM-IVの基準によるGAF値

③ ホームヘルプサービス利用実態

週間あたりの利用時間数やサービス内容。

④ ホームヘルプサービス利用アンケート

サービスの必要性、サービスへの希望の反映、サービス内容の満足度、利用の肯定度合などの総合的な評価と、いくつかの個別事項からなる項目についてのアンケートを利用者にお願いした。

(2) 調査方法

平成15年4月から同年6月末までの間に、この調査を実施した。

基本属性については、利用申し込み書・主治医の意見書さらに担当職員の家庭訪問実施時の記録等をもとに調査した。GAF値の評価は「DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き」²⁾の評価基準に照らし合わせて、本人の状況調査を実施した複数の職員と精神科医師を加えた3名以上により評価を行った。

ホームヘルプ利用実態については、本人の利用希望に基づき会議により決定されたサービスの利用時間等についての「利用決定通知書」により週間利用時間やサービス内容を把握した。

アンケート調査は、利用者102名全員の家庭訪問により面接・聞き取りにより職員が記入する方法とした。これは質問紙を配布し自分で記入するという方法では、アンケートそのものや質問内容についての趣旨が理解できない人の比率が高いことが予想されたため、この方法を選ぶこととした。またアンケートの内容については、平成11年全国精神障害者家族会連合会の行ったモデル事業実施者への調査とほぼ同様の内容とした。

3. 解析方法

基本属性およびアンケート調査の各項目につき、カテゴリごとに度数、パーセント、有効パーセント、累積パーセントを算出した。

週当たり利用時間とGAF値および年齢の関連を検討するために、ピアソン積率相関係数を算出した。

性別、家族状況（単身・単身以外）、日中の過ごし方（自宅・外出）、身体合併症（あり・なし）の各項目において群分けされた2群について、週当たり利用時間とGAF値の平均値をStudent t検定により比較した。

年齢と診断名を再カテゴリ化して群分けし、一元配置分散分析により週当たり利用時間とGAF値の平均値を群間比較した。また一元配置分散分析で群間に有意差があった場合はScheffe法による対比較を行った。

解析は統計パッケージSPSS 12.0 J for windowsを用い、有意確率 $p < .05$ を有意とした。

（大山 勉）

<引用文献>

- 1) 高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸訳: DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 1996
- 2) 高橋三郎, 大野裕, 染矢俊幸訳: DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院, 2002
- 3) 全家連保健福祉研究所: 精神障害者ホームヘルプサービスの現状と課題 '98~よりよい制度の創設に向けて~. 全家連保健福祉研究所モノグラフ No. 24. 全国精神障害者家族会連合会, 1999

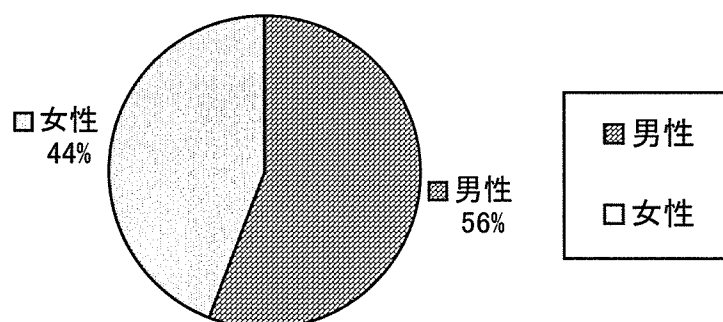
第4章 結果

1. 属性およびアンケート調査の結果

(1) 基本属性

1) 性別

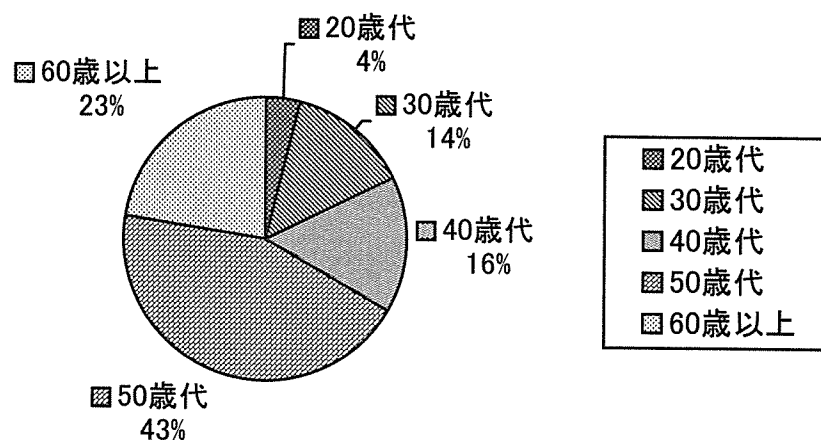
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
男性	57	55.9	55.9	55.9
女性	45	44.1	44.1	100.0
合計	102	100.0	100.0	



性別では、男性 57 名 (55.9%)、女性 45 名 (44.1%) と若干男性が多い結果であった。

2) 年齢区分

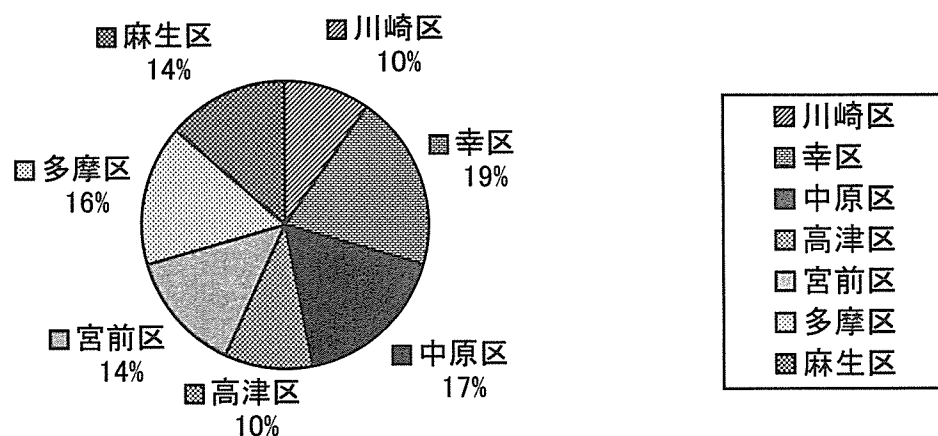
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
20 歳代	4	3.9	3.9	3.9
30 歳代	14	13.7	13.7	17.6
40 歳代	16	15.7	15.7	33.3
50 歳代	45	44.1	44.1	77.5
60 歳以上	23	22.5	22.5	100.0
合計	102	100.0	100.0	



調査時点の平均年齢および標準偏差は 51.1±10.3 歳であった。また最年少者は 23 歳、最年長者は 76 歳であった。年齢区分では、20 歳代 4 名 (3.9%)、30 歳代 14 名 (13.7%)、40 歳代 16 名 (15.7%)、50 歳代 45 名 (44.1%)、60 歳以上 23 名 (22.5%) となっており、50 歳以上が 66.6% で全体の 3 分の 2 を占め、中高年齢者が多い傾向にあった。

3) 地区

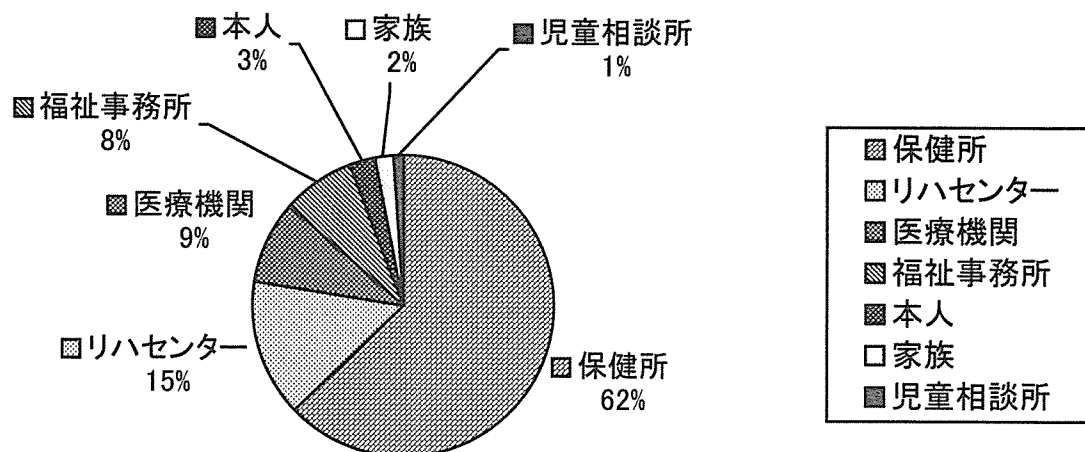
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
川崎区	10	9.8	9.8	9.8
幸区	20	19.6	19.6	29.4
中原区	18	17.6	17.6	47.1
高津区	10	9.8	9.8	56.9
宮前区	14	13.7	13.7	70.6
多摩区	16	15.7	15.7	86.3
麻生区	14	13.7	13.7	100.0
合計	100	100.0	100.0	



地区別の集計では、幸区 20 名 (19.6%)、中原区 18 名 (17.6%) が多く、川崎区 10 名 (9.8%)、高津区 10 名 (9.8%) が少ない結果であった。また医療圏別では、川崎南部医療圏 (川崎区、幸区、中原区) 48 名 (47.0%)、川崎北部医療圏 (高津区、宮前区、多摩区、麻生区) 54 名 (53.0%) とほぼ同数であった。

4) 依頼経路

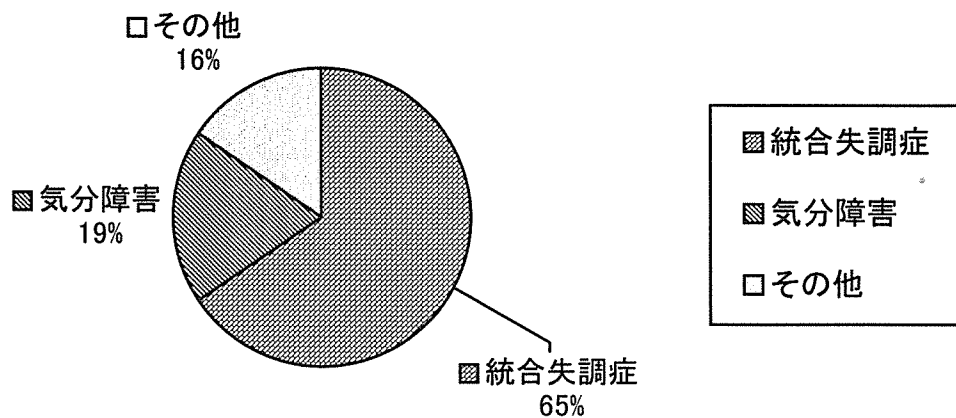
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
保健所	64	62.7	62.7	62.7
リハセンター	15	14.7	14.7	77.5
医療機関	9	8.8	8.8	86.3
福祉事務所	8	7.8	7.8	94.1
本人	3	2.9	2.9	97.1
家族	2	2.0	2.0	99.0
児童相談所	1	1.0	1.0	100.0
合計	102	100.0	100.0	



依頼経路としては、保健所が64名（62.7%）と6割以上を占め、川崎市リハビリテーション医療センター15名（14.7%）がこれに続いていた。本人・家族からの直接の依頼は合わせて5名（4.9%）と少なかった。

5) 主たる診断

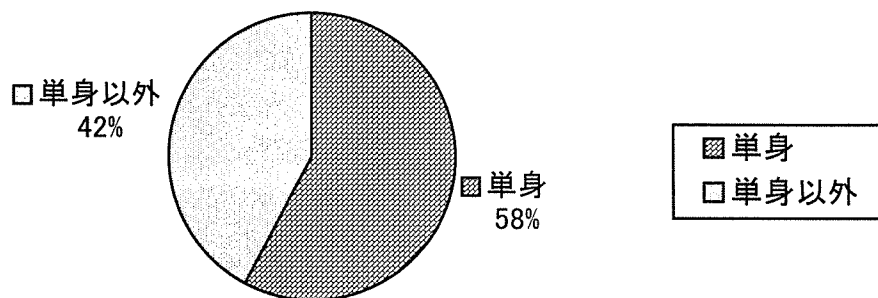
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
統合失調症	67	65.7	65.7	65.7
気分障害	19	18.6	18.6	84.3
アルコール関連	3	2.9	2.9	87.3
覚せい剤関連	1	1.0	1.0	88.2
境界性人格障害	1	1.0	1.0	89.2
回避性人格障害	1	1.0	1.0	90.2
パニック障害	2	2.0	2.0	92.2
強迫性障害	1	1.0	1.0	93.1
てんかん	2	2.0	2.0	95.1
精神遅滞	1	1.0	1.0	96.1
心因反応	1	1.0	1.0	97.1
その他	3	2.9	2.9	100.0
合計	102	100.0	100.0	



主たる診断については、統合失調症が 67 名（65.7%）で全体の 3 分の 2 を占め、気分障害が 19 名（18.6%）で全体の 2 割とこれに続いていた。また、人格障害は「主たる診断」では 2 名（2%）であったが、「従たる診断」を含めれば 6 名（5.9%）に及んでいた。

6) 家族状況

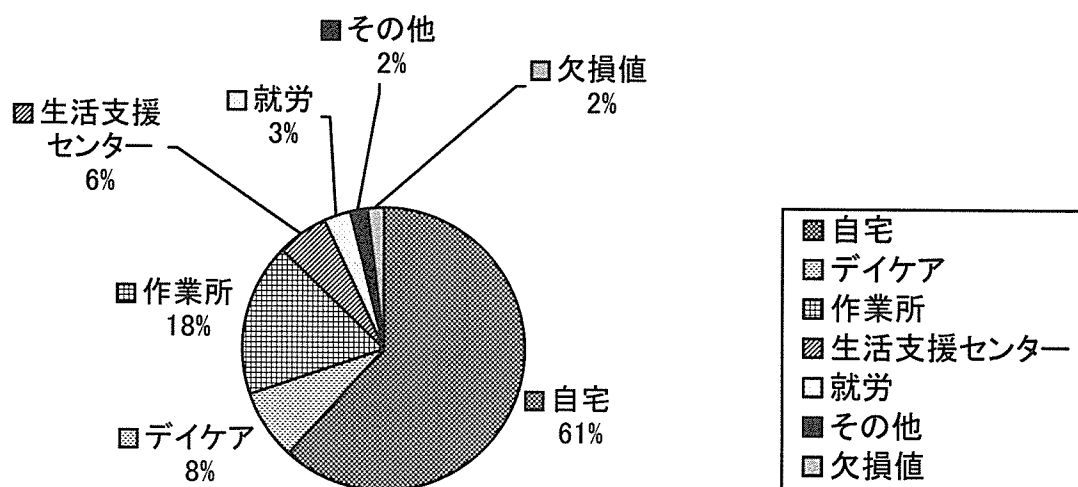
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
単身	59	57.8	57.8	57.8
単身以外	43	42.2	42.2	100.0
合計	102	100.0	100.0	



家族状況では、単身者が 59 名（57.8%）、単身以外の者が 43 名（42.2%）と単身者が若干多い傾向にあった。

7) 日中の過ごし方

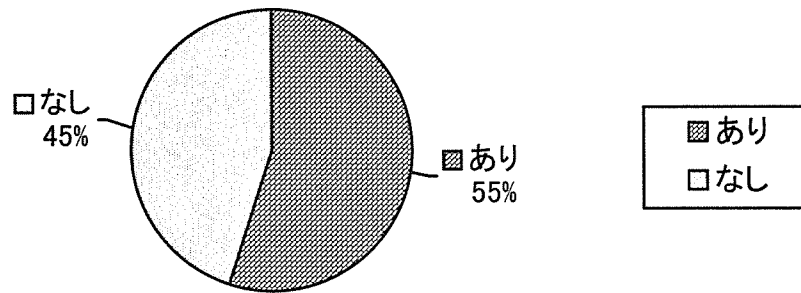
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
自宅	63	61.8	63.0	63.0
デイケア	8	7.8	8.0	71.0
作業所	18	17.6	18.0	89.0
生活支援センター	6	5.9	6.0	95.0
就労	3	2.9	3.0	98.0
その他	2	2.0	2.0	100.0
欠損値	2	2.0		
合計		100.0	100.0	



日中の過ごし方では、自宅で過ごす者が63名（61.8%）と6割を超えて多く、続いて作業所の18名（17.6%）であった。

8) 身体合併の有無

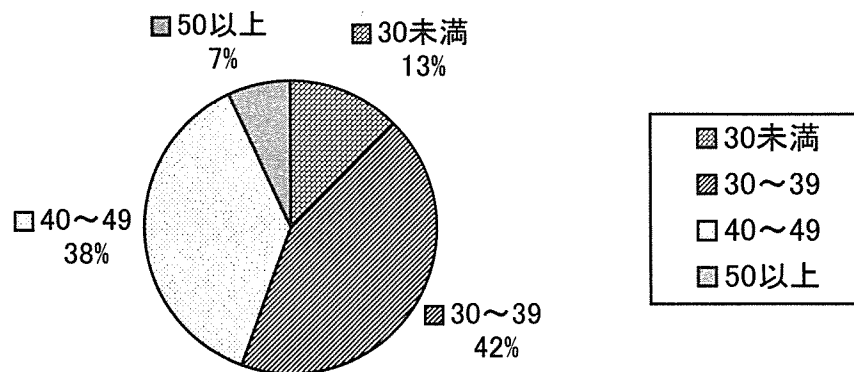
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
あり	56	54.9	54.9	54.9
なし	46	45.1	45.1	100.0
合計	102	100.0	100.0	



身体合併症がある者の割合は、56名（54.9%）と半数を超えていた。合併症のうち、糖尿病17名（16.6%）、高血圧症10名（9.8%）、高脂血症7名（6.9%）と生活習慣病の罹患が目立っていた。また、消化器疾患や呼吸器疾患などの内臓疾患の罹患者19人（18.6%）、歩行障害を伴う者4名（3.9%）、結核2名（1.9%）であった。

(2) GAF値

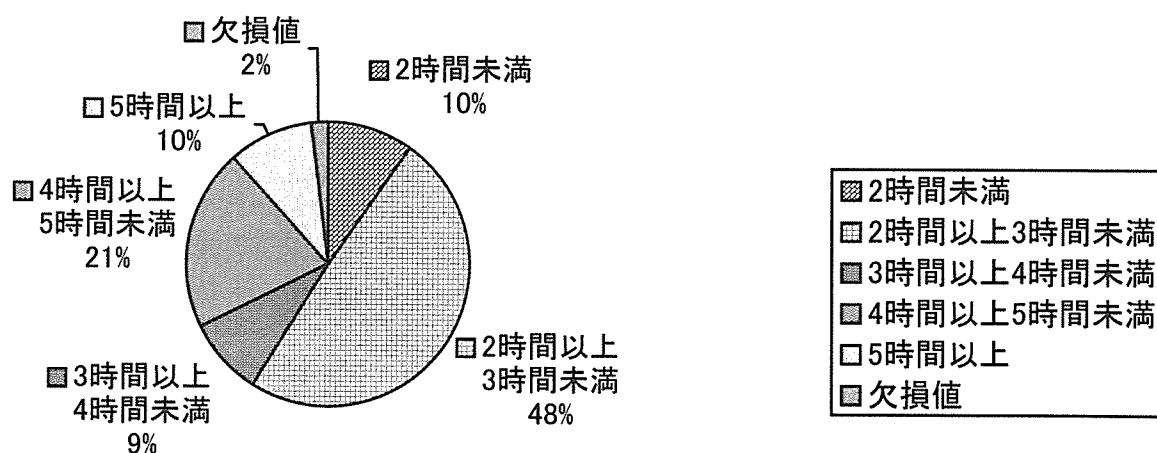
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
30未満	9	12.5	12.5	12.5
30～39	31	43.1	43.1	55.6
40～49	27	37.5	37.5	93.1
50以上	5	6.9	6.9	100.0
合計	72	100.0	100.0	



G A Fの平均値および標準偏差は 37.2 ± 8.5 であった。またG A F値の最小値は 5，最大値は 55 であった。50 未満の者が 67 名（93%）と大半を占めており，40 未満の者に限っても 40 名（56%）と半数を超えていた。

（3）サービスの週当たりの利用時間

	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
2 時間未満	10	9.8	10.0	10.0
2 時間以上 3 時間未満	50	49.0	50.0	60.0
3 時間以上 4 時間未満	9	8.8	9.0	69.0
4 時間以上 5 時間未満	21	20.6	21.0	90.0
5 時間以上	10	9.8	10.0	100.0
欠損値	2	2.0		
合計	102	100.0	100.0	

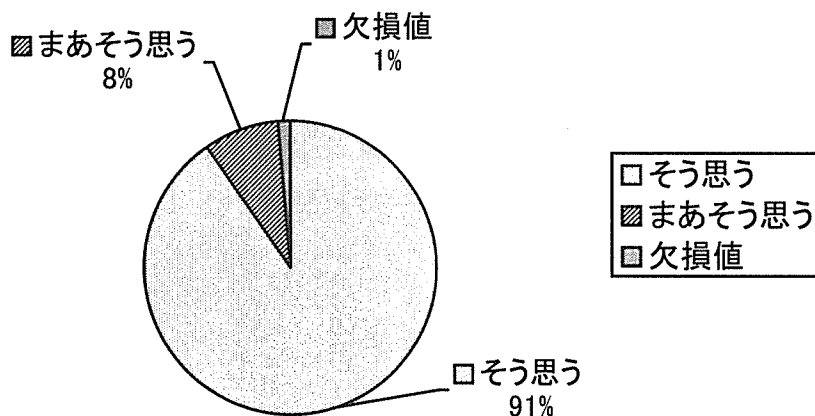


サービスの週当たりの平均利用時間および標準偏差は 2.9 ± 1.9 時間であった。また週当たりの利用時間の最小値は 0.5 時間，最大値は 15 時間であった。2 時間以上 3 時間未満の利用者が 50 名（49.0%）と全体の半数を占め，4 時間以上 5 時間未満の利用者が 21 名（20.6%）で続いていた。

(4) アンケート調査の結果

1) サービスの必要性

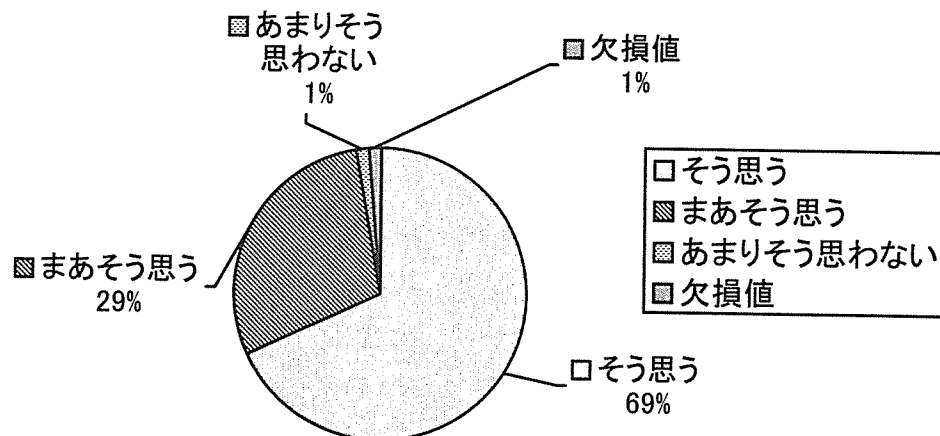
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
そう思う	65	90.3	91.5	91.5
まあそう思う	6	8.3	8.5	100.0
あまりそう思わない	0			
そう思わない	0			
欠損値	1	1.4		
合計	72	100.0	100.0	



サービスの必要性については、「そう思う」と回答した者が 65 名 (90.3%) と 9 割を超え、否定的な回答をした者は皆無であった。

2) 希望の反映

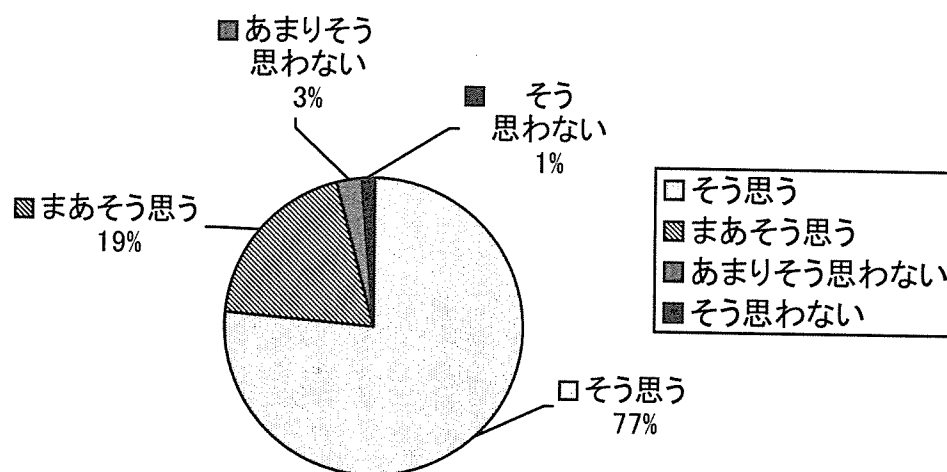
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
そう思う	49	68.1	69.0	69.0
まあそう思う	21	29.2	29.6	98.6
あまりそう思わない	1	1.4	1.4	100.0
そう思わない	0			
欠損値	1	1.4		
合計	72	100.0	100.0	



希望のサービスへの反映については、49名（68.1%）が「そう思う」、21名（29.2%）が「まあそう思う」と回答しており、否定的な回答は1名（1.4%）のみであった。

3) サービス内容の満足度

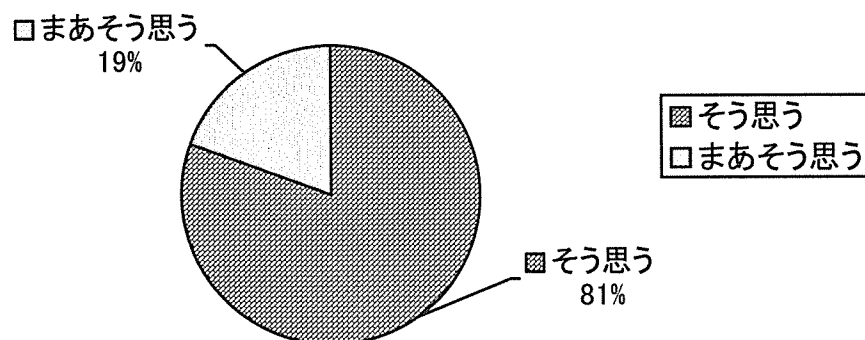
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
そう思う	55	76.4	76.4	76.4
まあそう思う	14	19.4	19.4	95.8
あまりそう思わない	2	2.8	2.8	98.6
そう思わない	1	1.4	1.4	100.0
合計	72	100.0	100.0	



サービス内容の満足度については、「そう思う」と答えた者は55名（76.4%）、「まあそう思う」と答えた者は14名（19.4%）で合わせて69名（95.8%）であった。

4) サービス全体の肯定評価

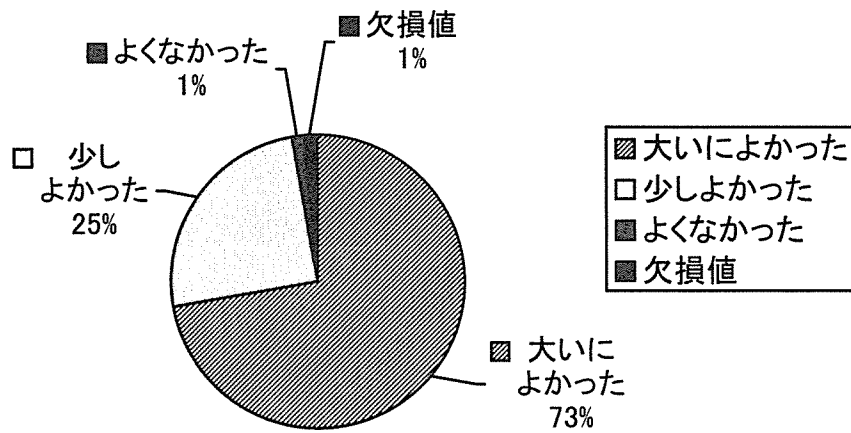
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
そう思う	58	80.6	80.6	80.6
まあそう思う	14	19.4	19.4	100.0
あまりそう思わない	0			
そう思わない	0			
合計	72	100.0	100.0	



サービス全体の肯定評価については、「そう思う」と答えた者は58名（80.6%）, 「まあそう思う」と答えた者は14名（19.4%）であり、否定的な回答は皆無であった。

5) 必要な援助が受けられた

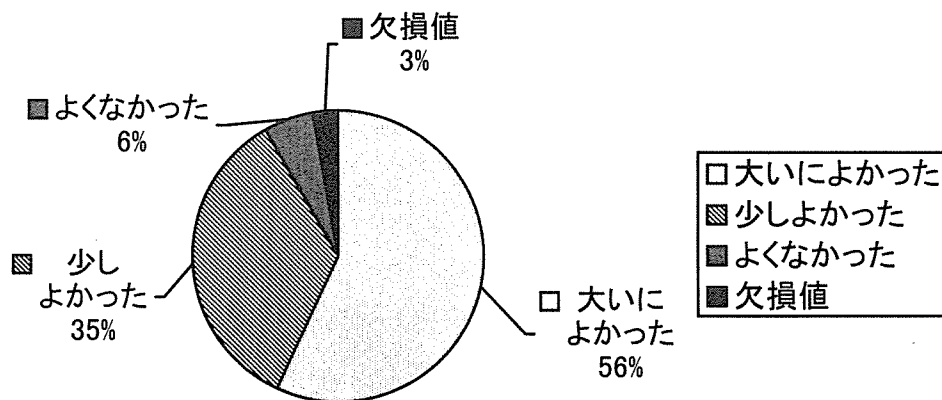
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	52	72.2	73.2	73.2
少しよかった	18	25.0	25.4	98.6
よくなかった	1	1.4	1.4	100.0
欠損値	1	1.4		
合計	72	100.0	100.0	



「生活に必要な援助が受けられた」については、「大いによかった」と答えた者は 52 名 (72.2%), 「少しよかった」と答えた者は 18 名 (25.0%) であり、合わせて 70 名 (97.2%) に達していた。

6) 心配が減った

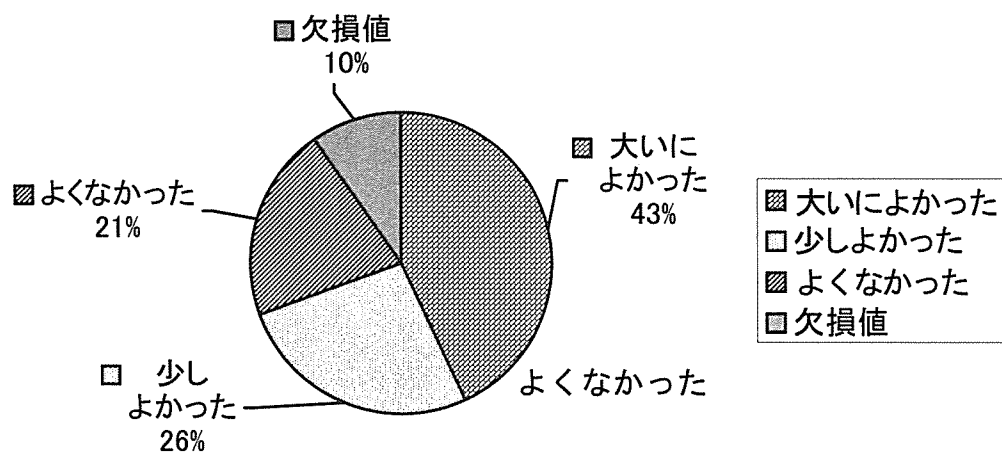
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	41	56.9	58.6	58.6
少しよかった	25	34.7	35.7	94.3
よくなかった	4	5.6	5.7	100.0
欠損値	2	2.8		
合計	72	100.0	100.0	



「生活上の心配が減った」については、「大いによかった」と答えた者は 41 名 (56.9%), 「少しよかった」と答えた者は 25 名 (34.7%) であり、合わせて 67 名 (91.6%) が肯定的な回答であった。

7) 相談する人ができた

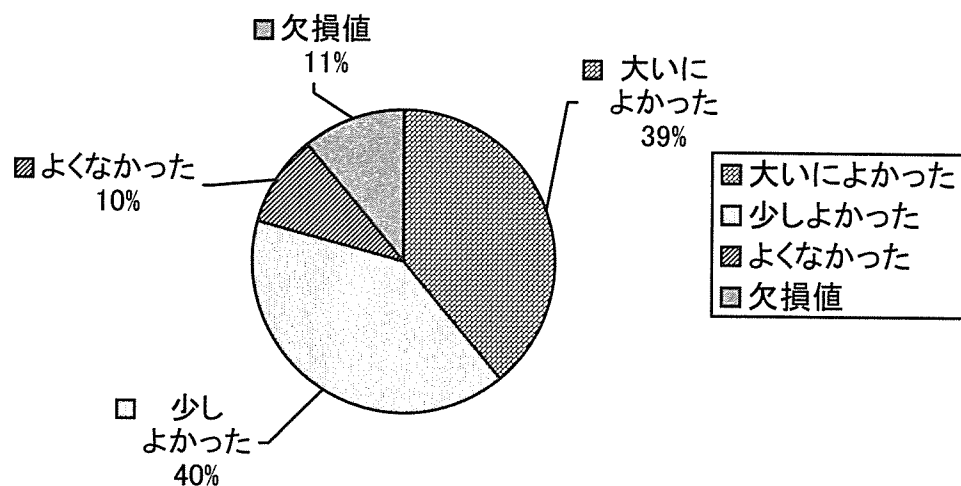
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	31	43.1	47.7	47.7
少しよかった	19	26.4	29.2	76.9
よくなかった	15	20.8	23.1	100.0
欠損値	7	9.7		
合計	72	100.0	100.0	



「困った時相談できる人ができた」については、「大いによかった」と答えた者は31名(43.1%)、「少しよかった」と答えた者は19名(26.4%)であり、合わせて50名(69.5%)が肯定的な回答をおこなっていた。また、「よくなかった」と回答した者は15名(20.8%)であった。

8) 意欲・自信がでた

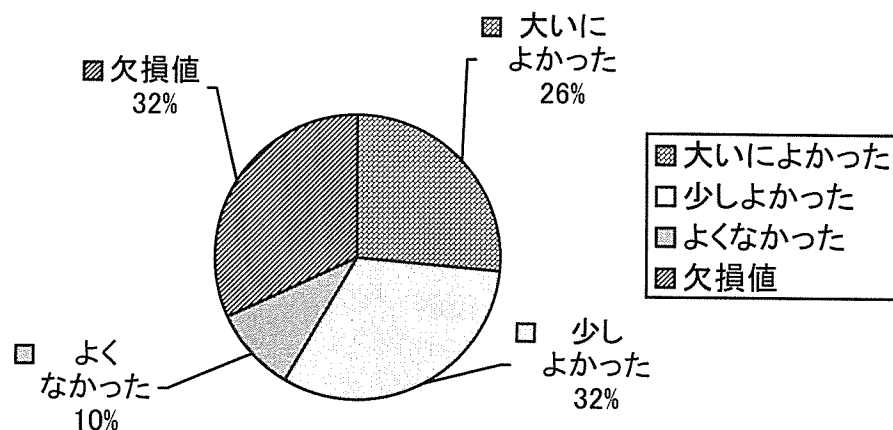
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	28	38.9	43.8	43.8
少しよかった	29	40.3	45.3	89.1
よくなかった	7	9.7	10.9	100.0
欠損値	8	11.1		
合計	72	100.0	100.0	



「生活する意欲・自信がでた」については、「大いによかった」と答えた者は28名(38.9%)、「少しよかった」と答えた者は29名(40.3%)であり、合わせて57名(79.2%)が肯定的な回答であった。また、「よくなかった」と回答した者は7名(9.7%)であった。

9) 家族との問題解決ができた

有効パーセント		人数	パーセント	累積パーセント
38.8	大いによかった	19	26.4	38.8
46.9	少しよかった	23	31.9	85.7
14.3	よくなかった	7	9.7	100.0
	欠損値	23	31.9	
100.0	合計	72	100.0	

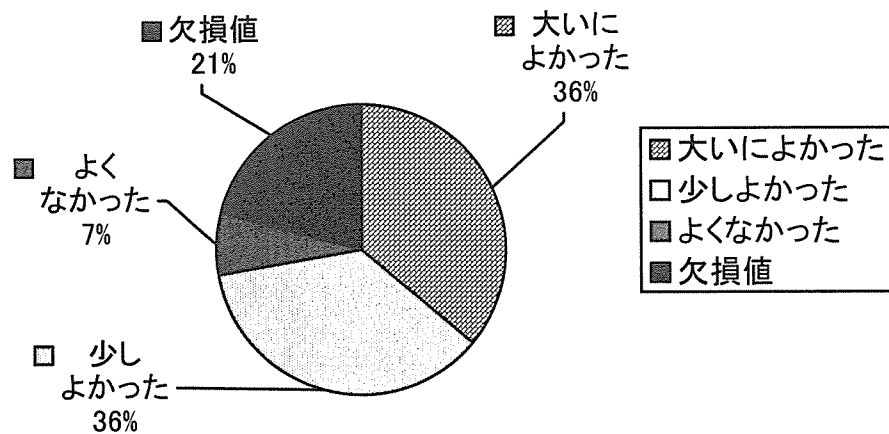


「家族などとの問題解決ができた」については、「大いによかった」と答えた者は19名(26.4%)、「少しよかった」と答えた者は23名(31.9%)であり、合わせて41名(58.3%)

が肯定的な回答をおこなっていた。また、「よくなかった」と回答した者は7名（9.7%）であった。

10) 家族負担が減少した

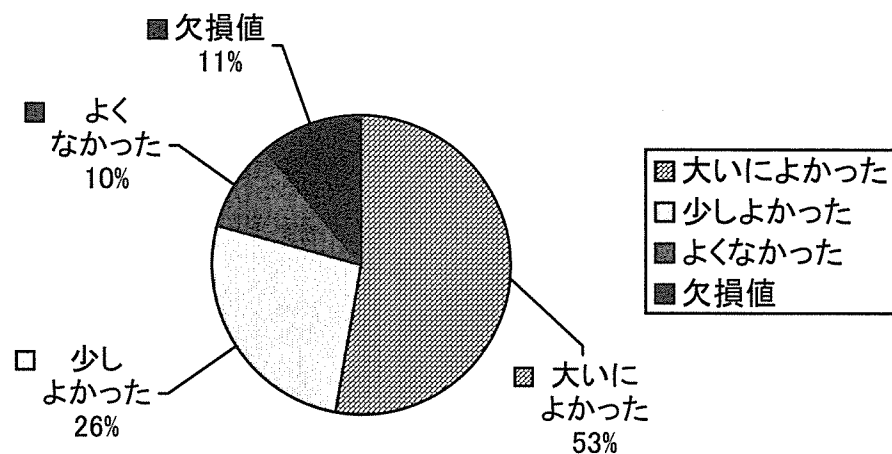
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	26	36.1	45.6	45.6
少しよかった	26	36.1	45.6	91.2
よくなかった	5	6.9	8.8	100.0
欠損値	15	20.8		
合計	72	100.0	100.0	



「家族への負担が減った」については、「大いによかった」、「少しよかった」と回答者はそれぞれ26名（36.1%）ずつであり、合わせて52名（72.2%）が肯定的な回答をおこなっていた。また、「よくなかった」と回答した者は5名（6.9%）であった。

11) 自分を理解する人ができた

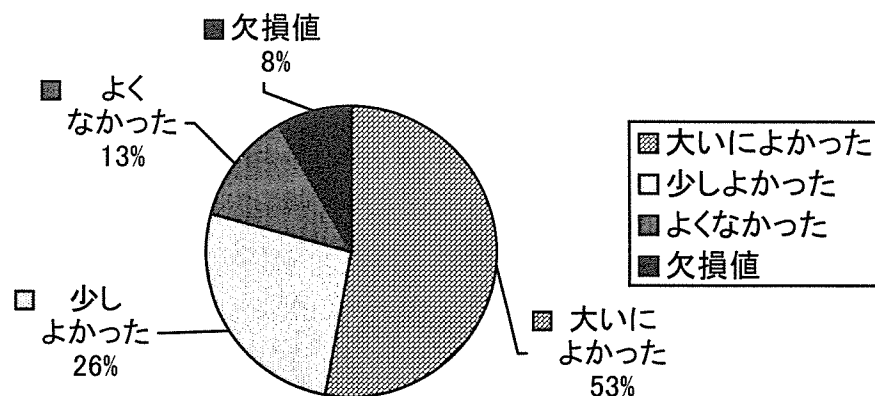
	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	38	52.8	59.4	59.4
少しよかった	19	26.4	29.7	89.1
よくなかった	7	9.7	10.9	100.0
欠損値	8	11.1		
合計	72	100.0	100.0	



「自分を理解する人ができた」については、「大いによかった」と答えた者は38名(52.8%)、「少しよかった」と答えた者は19名(26.4%)であり、合わせて57名(79.2%)が肯定的な回答をおこなっていた。また、「よくなかった」と回答した者は7名(9.7%)であった。

12) 気持ちが明るくなった

	人数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
大いによかった	38	52.8	57.6	57.6
少しよかった	19	26.4	28.8	86.4
よくなかった	9	12.5	13.6	100.0
欠損値	6	8.3		
合計	72	100.0	100.0	



「さびしさがまぎれ気持ちが明るくなった」については、「大いによかった」と答えた者は38名(52.8%)、「少しよかった」と答えた者は19名(26.4%)であり、合わせて57名